

ベジャート (アルブ・ナースイル) は、いくつかの拡大家族に分かれている。この一族には主要なグループが四つある (図1と図2を参照) が、ここで関係ある主要な分割はアル=ニダー一族であり、アフマド・ハサン・アル=バクル元大統領、アドナン・ハイラッラー・トルファ元国防大臣、サッダームの異母兄弟であるワトバーン・ハサン、サバアーウィ・ハサン、バルザーン・ハサンはこのグループの出身であり、アルブ・サルタンとアルブ・マジードの二つの主な下部集団があるアルブ・ガフォール一族もこのグループの出身である。サッダーム・フセインは、アル=マジードの子孫である (図3参照)。

マジードやマジードの直接の同盟者 (ドゥール出身者や北のティクリーティ等) が居住する地域は、イラクのサラハッディーン州において知事の地位を与えられてきた。この区域の人口は約80万人 (1994年推定) で、その内の30万人が都市中心に住み、50万人が地方に住んでいる。主な都市はサーマッラー、ティクリート、オウジャ、ベイジ等である。ベジャート一族の相対的な規模について公式記録はないが、ティクリート出身の元 RCCメンバー、サラハ・オマル・アリは、オウジャ、ティクリート、ドゥールの全部族の人数を約25000人、その内の半数が男性と推定している。これら集団において中心的な活動家は数千人になるだろうが、ほとんどが軍や治安に集中し、民間部門の上流階級に一部が属している。

この集団は、実際には少数派に入る。このような基盤の狭さを避けるため、彼らは部族のバトロン・クライアント関係を他の一族や部族に拡大している。部族のピラミッド構造を次の順番に単純化することができる。

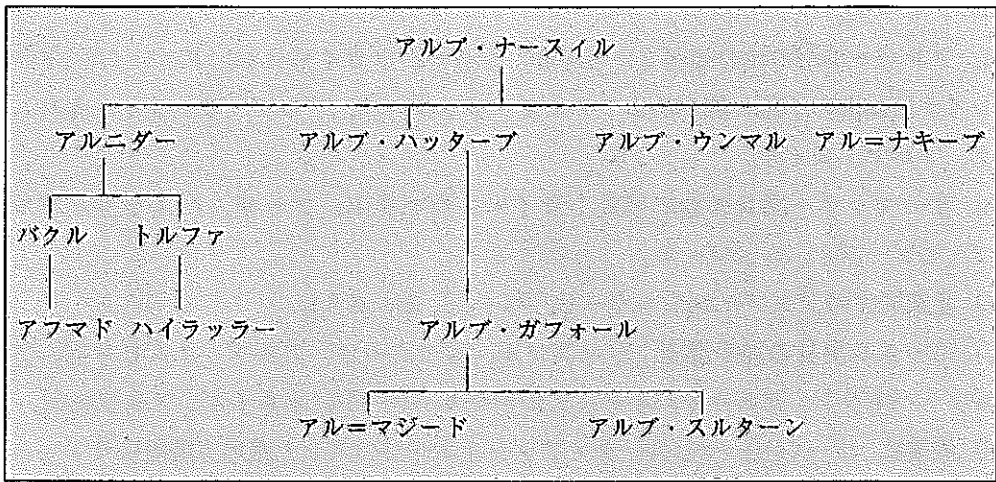
- 1) ベジャート。この中心は、アルブ・スルターン出身の他の家族が支援するアル=マジード家族の手の中にある。
- 2) ティクリート出身の別の集団：シュアイシュ、アルブ・ヒシュマン、ハディー

図1 ティクリート閥の主要四集団

一族名	主要出身政治家
シュアイシュ	ターヒル・ヤヒヤー、ハルダーン・ティクリーティら
ハディースイューン	サイード・アブド・バーキーら
アルブ・ヒシュマン	
アルブ・ヤーシーン	

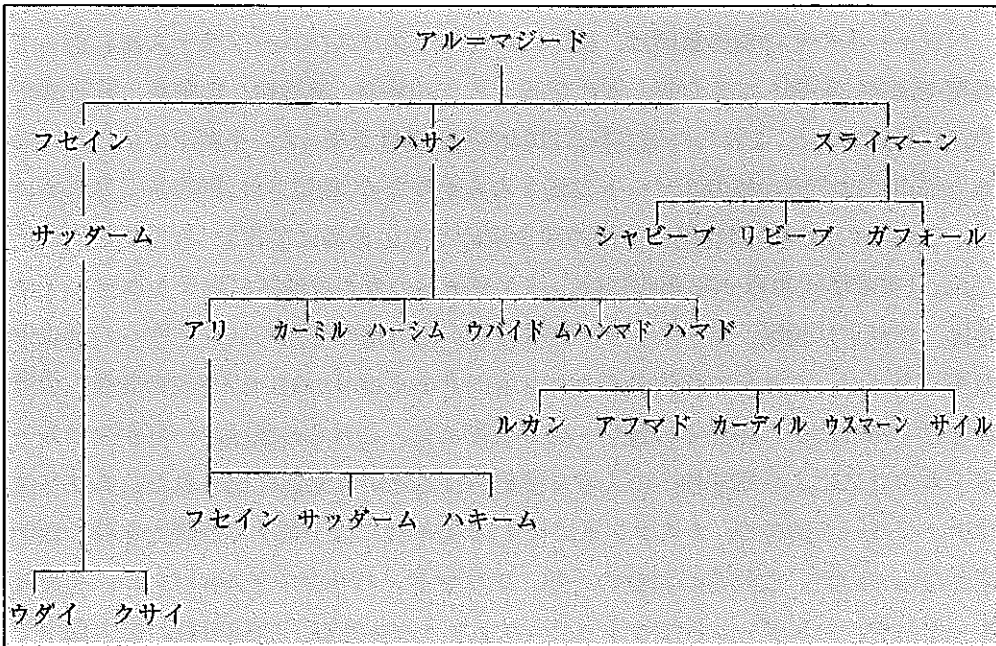
(出所：筆者作成)

図2 オウジャ村出身一族系図



(出所：図1に同じ)

図3 アルマジード一族家系図



(出所：図1に同じ)

スイユーン、アルブ・ヤーシーン。

3) ドゥーリ。

4) アンバール州の他の部族：オネイザ、ゾウバ、ウガイダート、ドゥレイミ。ドゥレイミには別の下部一族がある：アルブ・アッサーフ、アルブ・リーシャ、ミハムダ、アルブ・アイサ。

5) サーマッラー出身の他の部族：サイー、ウバイド、アッザ、ハズラジ、アルブ・ヒアーズィ、ジュブール。

6) 北部居住のジュブール(シルガート、ベイジ、モースル)。

7) モースル出身の別の部族：シャンマル、ジャミーラ、アルブ・イムヒマド、アルブ・バドラン、アル＝オバイド、アル＝ウガイダート、オネイザ、アッザなど。

8) 最後に、ナーシリーヤとスーク・アッシュユーフのスナ派地主階級のサドゥーン一族。

いわゆるスナ派三角形に集中している実際の部族同盟は、バース党支配の初期の時期を通して、党のポピュリスト・イデオロギーで覆い隠されていた。

2. 地方都市の衰退

ベジャートやその他の集団は、長年にわたりチグリス、ユーフラテス河に沿って農業や商業に従事してきたが、近代交通システム(鉄道、蒸気船、自動車、航空機)が急速に発達すると、これらの地方都市は経済的重要性を失った。王制下ではこれらの地方都市には中央の権力エリートに属する人が少なく、無視され、軽蔑さえされていた。これらの地域の困窮民は生活の糧を求めて主に首都に移住し、そこで集団生活した。1950年代初め～60年代には、バグダードのカルフ地区にはティクリーティ地区、ウガイリ地区、サーマッラー地区など、出身地や部族の名前を取った地域が数多くあった。これらの移住者がなれるものといえばせいぜいが学校の先生、公務員などであったが、1930年代後半～40年代初めに、これらの集団の一部がマウルード・ムフリスにより軍学校への入学を認められるという幸運に恵まれた。ムフリスはティクリート出身で、オスマン軍に仕え1950年代には王制下で影響力を持つ政治家となっていた。これらの将校の一部、アフマド・ハサン・アル＝バクル、ターヒル・ヤヒヤ、ハルダーン・アブドゥル＝ガッファール等が、1958年後の権力闘争で大統領を目指していたアブドゥル＝サラーム・アーリフ(1966年死亡)と手を組んだ。さらに1968年にはベジャートは軍での地歩を築いた他、バクル将軍やその親族で若い文民党員のサッダーム・フセインなどを中心として、バース党内で強力な指導的

立場にあった。

3. 血縁集団の社会的役割の拡大

イラク社会において強固な血縁的紐帯が存在するということと、近代国家で特定一族や部族が優位を持つということとは別のことである。血縁集団が近代の大衆政治と組み合わさって新全体主義国家を創設する手段になった理由は、国家そのものの発展に多いに関係がある。イラクは今世紀初頭には地域/部族社会であった。1900年当時は都市人口は全人口のわずか9%にすぎず、残りの91%のうち49%は定住農耕部族民、42%は遊牧部族民であった。しかしその後70年もしないうちにこの比率は逆転し、現在人口の72%が都市住民で、これは欧州の平均(65%)より高い比率である。

都市/地方人口逆転の原因は地方社会からの大量の移民の発生であるが、彼らは彼らの社会が保持していた価値観、以前の生活用式、伝統的な連帯ネットワークを引きずってきた。その一方で、彼らは新しいイデオロギーや仲間、つまり近代的な党に引きつけられた。革命期間(1958～68年)における国家による継続的な恐怖政治と大衆操作によって近代的市民運動が破壊され、市民社会の活力を奪った。そして破壊された市民社会のあとに残された真空が、一時的で原初的な社会紐帯によって埋められたのである。その原初的紐帯のひとつが、部族的紐帯であった。

4. 血縁集団の政治的最高位への上昇

ベジャートや他の血縁集団が政治的頂点に昇りつめることができた原因は、1958年から68年の革命時代における国家の構造的不安定に関係がある。

革命時代の特徴を一言でいえば、議会などの近代的代表制度の廃棄と軍人政治家への権力集中である。この時期に軍が決定的な役割を果たすようになったことは、以下の二つの相容れない対立する傾向を生んだ。すなわち、それまで排除され市民権を奪われていた中間層の地位が改善される一方で、エスニシティ別、宗教別/地域社会別の代表制と権力共有のシステムが崩壊した、という傾向である。フィービー・マールは、王制の最後の十年間(1948～1958年)といわゆる革命期間の最初の十年間(1958～1968年)の支配階級エリートの社会的、地域的、民族的、宗教的出自を調査して、後者で軍の役割が増大する一方でクルドとシーア派の発言力が大幅に低下し、また都市、特にバグダードのエリートとは対照的に地方の都市や地域の発言力が増大した、と結論している。この過程はクルド人とシーア派の国民統合に

としての障害となり、社会的、文化的、民族的な多様性を反映させるものではなかった。

ところで、1958～68年ほど極端に不安定な時期はなかった。この期間に軍による権力奪取は1958年、1963年2月、1963年11月、1968年7月の都合四回成功した。軍エリートの分裂がこの時期慢性的に起こっており、支配階級である軍の安定的な結束力や近代的な凝集力を欠いていた。こうした軍エリートの分裂を防ぐためには、軍規律やイデオロギー的、経済的凝集力ではなく、凝集力と安定性をもたらすような新たな源泉——より恒久性を持った——が必要となる。この新たな源泉を模索してさまざまなパターンが試みられた。そのうち、カーシム政権下での軍事体制、1963年2～11月のバアス党一党支配、アールフ政権初期の軍事/大衆的一党支配体制、アールフ政権後期のジュマイラート一族(ドゥレイミからの分派)にみられる軍と血縁集団の共闘という、少なくとも四つのパターンが出現した。しかしこれらは、制度的正統性や全国レベルの政治参加を欠いた体制の内部に、必要とされる凝集力を生み出すことに失敗した。

このように、血縁集団に依存し分裂状態にある支配階級が安定性や継続性、エリート間の凝集力を維持することに常に失敗し続けていた状況下で、血縁集団による指導のもとでの大衆政治という新しいパターンが生まれたのである。十年間の継続的な権力闘争の中でカーシム政権支持者であったり、クーデター未遂を起こした将校に連座したり、政権の座を追われた政権要人と同部族だったり、3000人以上の将校がパージ、解職ないし強制的に退役させられたが、ベジャートとティクリーティだけは生き残って軍内のフリーハンドを得た。

第三節 強い国家と弱い社会

血縁的紐帯と近代的大衆政治の組み合わせは新たな特徴であり、強調すべき点であるが、これが新全体主義国家の唯一の無限の権力の源泉ではない。その要素とは、唯一の所有者でありかつ生産者としての国家が持つ経済力(石油収入を初めとしたすべての主要産業の国家による統制)であり、国家の持つ強力無敵の治安機関であり、イラク一国民族主義の象徴を操作することによって正統性を生み出す国家の能力であり、社会階級を再編し、クライアントとしての民間セクターを生み出す国家の推進力であり、分割統治するために社会的分割を再編する国家の能力である。一言で言えば、新全体主義体制は、イラクの国家と社会の政治的發展を決定づける要因であり、その本質は、国家を政治的空間として、富の社会的権力関係から切り離